巻　頭　言

コロナパンデミックと Social Entrainment

程　肇✉
金沢大学 理工研究域 生命理工学系

この文章の依頼があった昨年のメールには、過去のものと同様格調の高いものをという一文とともに、数年分の巻頭言のコピーが添付されていた。おだてられればその気になってアイディアを用意していたのだが、この新型コロナウィルスパンデミックで、それもすべて吹っ飛んだというのは冗談である。さはさりながら、いずれにしろ今回のパンデミックに触れざるをえない中、日の目を見ることなかったアイディアを温めていなかったのは、不幸中の幸いともいえる。

約 100 年前のインフルエンザウィルスの世界大流行以来のパンデミックだそうである。日本中の殆どの大学が今春以降一時ロックアウト状態にまで陥ったことにより、それでなくても疲弊した研究や教育環境の中にいる教員や学生に、大いなる混乱を招いた。大学に勤めているため、幸か不幸か十分すぎる閉鎖期間の中、本件の対応について考えざるを得なかったので、今回はそれに触れながら筆を進めたい。

感染が全国へ広がっていった春先、その対応がいささか理性を欠いたものになりがちだったのは、我々にとって初めての経験ということで、十分説明できる。いずれ、最適解へ収斂するものだと眺めていたのだが、なぜか現在（2020 年 8 月末日）にいたっても未だその検査や感染防止法などについて、侃々諤々の議論が続いている（ように見える）のは、不思議でしかない。もう少し事実や科学的思考に基づいてそれらの方針を決定、あるいは柔軟に運用できないのであろうか。社会的同調という時間生物学ではなじみのある術語が、感染防止対策の一つとして、人々の口端に上るのも大いに違和感がある。7 月に“不要不急“でない所用のため、一度金沢･東京間を往復したのだが、東京の通勤電車の混雑が旧態依然であること、盛り場も夜遅くまで賑わっていることに驚いた。同時期金沢で酒席を囲もうとすれば、店は貸切、窓にはカーテンで、禁酒法時代と違うのは暗号を入口で唱えずとも入店できることくらいである。少し前までならば、地下に潜った状態である。いわゆる“社会的同調”の程度が、金沢と東京で著しく異なっているのを実感した。大変残念なのは、双方それぞれの人々の論理的判断に基づいて、“社会的同調”を定量的に決めているとは、とても考えられない点である。いずれにしろ、追従・忖度等と同様に、ふわっとした雰囲気による多様性の制限に、社会的同調という言葉をあてることを受け入れることは、時間生物学を研究するものにとって禁忌であろう。

今回のパンデミックからも明らかなように、集団レベルでの研究や教育の存続・発展には社会の平安が絶対に必要である。ただし、よく知られているように、ニュートンが万有引力の法則を発見したのは、コレラパンデミックによる大学休校期間中だという。人間万事塞翁が馬、研究の進展には極めて個人的な深い思索も必要なのであろう。時間生物学分野でもこの期間に、のちに大輪の花を咲かせる研究が芽生えているものと信じたい。そのための自律的な社会的同調なら受け入れてもよい。自律的と社会的同調が齟齬をきたしているようにも思えるが、このまま筆をおく。寛恕をもまた信じたい。

✉ tei@staff.kanazawa-u.ac.jp